

タイトル	江藤淳『アメリカと私』論：変容する「私」
著者	塩谷，昌弘
引用	年報新入文学，5：158-199
発行日	2008-12-31

江藤淳『アメリカと私』論

——変容する「私」——

塩谷 昌弘

はじめに

批評家・江藤淳は一九六二年から一九六四年までの二年間、ロックフェラー財団の研究員として、アメリカのプリンストン大学に留学している。帰国後に刊行した『アメリカと私』（一九六五）⁽¹⁾は、このアメリカ体験をまとめた留学記である。

近年では、この『アメリカと私』は同時代の文化史的な背景から論じられることが多い⁽²⁾。

例えば、江藤はロックフェラー財団の給費留学生としてアメリカに留学したが、それ以前にも福田恆存、中村光夫、大岡昇平、阿川弘之、小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三、有吉佐和子といった文学者た

ちがロックフェラー財団の給費留学生としてアメリカに留学している⁽³⁾。こうした文学者の留学の背景には、一九五二年以降のロックフェラー財団による日本およびアジア諸国に対する親米化を企図した文化政策があった。つまり、江藤やそれ以前に留学した文学者たちはその文化政策の一環として招かれたわけである。

また、江藤が留学した時期、アメリカではフォード財団の資金を背景に組織された日本の近代化に関する研究プロジェクトが進行中であった。冷戦構造のもとで、アメリカは第三世界に対する近代化のモデルとして、日本の近代化モデルを範とした。このプロジェクトの研究成果である研究報告全五巻（一九六八）⁽⁴⁾を出したのは、他でもないプリンストン大学であった。江藤はプリンストン大学で「East Asian Studies Program」という研究会に参加してもいたのである。

帰国した江藤は、『アメリカと私』を刊行した翌月、「日本文学と『私』——危機と自己発見」（一九六五・三）⁽⁵⁾という評論を発表し、そこで、江戸幕府の公式イデオロギーであった「朱子学的世界像」を再評価した。この「朱子学的世界像」の再評価こそがアメリカによる「日本近代化論」研究の所産でもあった。つまり、江藤はアメリカの役割期待に応えたわけである。

おそらく、現在この『アメリカと私』を読む場合、いま述べたような事実が考慮されなければならぬであろう。そのように読むことで、『アメリカと私』は単なる外国滞在記としてではなく、文化表象として、戦後日本の文化占領の一資料として読まれ得るのだと思われる。

しかし、本稿ではそのような文化的コンテクストを視野に入れながらも、『アメリカと私』の「私」に注目して論じていきたい。後に触れるが、江藤淳には「〜と私」というタイトルのエッセーが多くある。

この「〜と私」というタイトルが象徴しているように、江藤は「私」を批評の対象としたのである。つまり、江藤淳という批評家を理解しようとするとき、この「私」を検証しなければならぬのである。本稿は「〜と私」の端緒である『アメリカと私』の分析を通じて、江藤淳の「私」を表出させる試みである。

ところで、この『アメリカと私』は読者の読みを方向付けるような構成をしている。別の言い方をすれば、作者の編集の痕跡とでも言うべきものが刻み付けられている。『アメリカと私』は、江藤が留学中に日本の新聞社や通信社に書き送った通信文と、帰国してから『朝日ジャーナル』に連載したエッセーからなっている。つまり、「私」のアメリカ滞在の記録と記憶が編み上げられたテキストなのである。その記録と記憶は、折り重なりながらも微妙な差異を見せている。しかし、まさにそのような差異の起伏を平面化し、読み手の読みを誘引するかのような配置構成がなされているのである。

本稿では、『アメリカと私』の「私」の記録／記憶の差異を表出させるために、既存の配置構成を解体し、それぞれのテキストが発表された順に再配置する。さらに、テキスト内で語られている時間にしたがって比較検証して、『アメリカと私』の「私」の性質を明かにしてみたい。

一 『アメリカと私』のタイトル・構成

江藤淳の『アメリカと私』は一九六五年二月に朝日新聞社から刊行された。以後、現在までに、一九六九年・講談社の名著シリーズ、一九七二年・講談社文庫、一九九一年・文春文庫、二〇〇七年・講談

社芸文庫の四冊が刊行されている⁽⁶⁾。この『アメリカと私』は、江藤淳がアメリカから帰国して、『朝日ジャーナル』に「アメリカと私」(一九六四・九・六―一・八)と題して連載したものと、留学中に日本の新聞社や通信社に書き送った通信文「アメリカ通信」から成っている。

ところで、江藤淳はこの『アメリカと私』を端緒に、多くの「と私」というタイトルのエッセイを書いた。『アメリカと私』を刊行した翌年の一九六六年には「戦後と私」、「文学と私」、「犬と私」などを発表・刊行し、それ以後一九九九年の『妻と私』まで、トータル五冊、二九編にもものぼる数を産出した⁽⁷⁾。

これらの一連の「と私」作品は『アメリカと私』をもって嚆矢としているわけだが、先に述べたように『アメリカと私』を刊行した翌月、江藤は「日本文学と『私』——危機と自己発見」という評論を発表し、「朱子学的世界像」を再評価した。これは前述の通り、アメリカの「日本近代化論」研究の所産でもあるのだが、江藤はその再評価を近代日本文学における「私」の問題として論じたのだった。

ここで、その評論の骨子を見ておこう。まず、江戸幕府の公式イデオロギーであった「朱子学的世界像」のなかに安住していた日本人が、明治の近代化に伴い「西洋」という「他人」に出会うことで、「自己の同一性」の危機に陥ったことが指摘される。そして、坪内逍遙がお雇い外国人教師の出したシエイクスピアの「ハムレット」に関する問題を、江戸戯作的な勧善懲悪主義の観点から論じて落第したエピソードが参照され、逍遙がお雇い外国人という「西洋」に出会うことで「自己の同一性」の危機に陥り、文学を近代化するために『小説神髓』(一八八五)を書いたのだと論じられる。そして、漱石や鴎外といった「朱子学的世界像」の影響下にあった作家と、武者小路実篤らその影響下にはなかった

「白樺」の作家たちが対比され、漱石・鴎外世代を最後に「朱子学的世界像」が消えてしまったというのが、「白樺」＝「戦後文学」という江藤独自の見解となるのである⁽⁸⁾。

ここで重要なのは、江藤が「自己の同一性」の危機という精神分析学的な概念⁽⁹⁾を文学史に適用していることである。というのは、この「自己の同一性」の危機という主題は『アメリカと私』において、すでに繰り返し言及されていることだからである。つまり、『アメリカと私』では江藤淳の「同一性」の危機が描かれ、「日本文学と『私』——危機と自己発見」では、日本近代文学の「私」における「自己の同一性」の危機が描かれているのである。したがって、『アメリカと私』は近代日本文学の「私」の問題が、江藤自身のアメリカ体験として主題化されているのである。

そのように考えると『アメリカと私』を読む場合、この「私」の視点から読むのが適切かと思われる。本稿では、『アメリカと私』の「私」がどのように表出しているかを明らかにしてみたい。

次に『アメリカと私』の構成を確認しておく。

この作品は二部構成になっている。第一部の「アメリカと私」は、江藤淳がアメリカから帰国した後、『朝日ジャーナル』に連載したもので、第二部の「アメリカ通信」は留学中に日本の新聞社や通信社などに書き送った通信文である。したがって、第一部「アメリカと私」と第二部「アメリカ通信」は、書かれた順序とは反対に配置されていることになる。

この配置に従って『アメリカと私』を読み進めると、帰国後に連載形式で書かれた第一部「アメリカと私」に比べて、通信文として断片的に書かれた第二部「アメリカ通信」は、存在感が極めて希薄にな

ってしまう。このことについて、川嶋至は「単行本『アメリカと私』を読みとおしてみて、私が最初に得た感想は、第二部『アメリカ通信』より、第一部のほうがはるかに面白かった」、「『アメリカ通信』には「話題と話題をつなぐ環がない」のに対して、「アメリカと私」は江藤がアメリカで得た「新しい体験」を「統合した構成力」があると端的に指摘している⁽¹⁰⁾。つまり、帰国後に書かれた「アメリカと私」には、アメリカ体験の再構成が為されているのである。

そして、この再構成のために第一部「アメリカと私」は『アメリカと私』という書物全体の読みを方向付けてしまっている。例えば、佐藤泉は「自己同一性の危機を強力なテコとした自我の再統合、再強化の物語」⁽¹¹⁾だと述べている。また、松下浩幸も「アイデンティティの希求と獲得の物語」⁽¹²⁾だとしている。いずれも幾分比喩的な意味もあるだろうが、『アメリカと私』全体を「物語」だとみなしているのは確かである。しかし、これは帰国後に再構成された第一部「アメリカと私」にのみ言えることで、通信文として断片的に書かれた第二部「アメリカ通信」には「物語」性や「構成力」は見られないのである。

そこで、本稿では『アメリカと私』をその配置構成に従って読むのではなく、それを一旦解体した上で、テキスト内で語られている時間にしたがって再配置してから分析に移りたい。まず、『アメリカと私』の配置を初出の通りに並べ替えると次のようになる。なお、便宜的に「アメリカ通信」の各章には囲み数字を、「アメリカと私」の各章にはローマ数字をつけた。

「アメリカ通信」(第二部)

- ① 「第一信」〔『東京新聞』、一九六二年一〇月一四、一五、一六日〕
- ② 「十月二十八日の午後」〔同、十一月二四、二五日〕
- ③ 「キューバ危機の中で」〔『共同通信』文化特信扱い、同一月二七日〕
- ④ 「『不安な巨人』日本について」〔『東京新聞』、一九六三年一月一〇、一一、一二日〕
- ⑤ 「生きている『古さ』」〔『共同通信』文化特信扱い、同一月一八日〕
- ⑥ 「合衆国と地方主義」〔『東京新聞』、同二月二四、二五、二六日〕
- ⑦ 「深い南北の溝」〔『共同通信』文化特信扱い、同三月二日〕
- ⑧ 「冬と春の間」〔『東京新聞』、同三月二八、二九、三〇日〕
- ⑨ 「青春と狂気」〔同、五月二二、二三日〕
- ⑩ 「海老原喜之助の回顧展」〔『芸術新潮』、同九月〕
- ⑪ 「私を見たアメリカ」〔『朝日新聞』、同九月一〇、一一、一二日〕
- ⑫ 「ケネディ以後」〔同、一九六四年二月六、七日〕
- ⑬ 「エリート」〔同、三月二二、二三日〕
- ⑭ 「アメリカの古い顔」〔同、五月一、二、三日〕
- ⑮ 「国家・個人・言葉」〔同、六月一四、一五、一六日〕
- ⑯ 「米国から欧州へ」〔同、八月二、三日〕
- ⑰ 「学問の自由化」〔同、九月三、四日〕

「アメリカと私」〔第一部〕

- I 「適者生存」(『朝日ジャーナル』、一九六四年九月六日)
- II 「プリンストン」(同、九月二三日)
- III 「大学」(同、九月二〇日)
- IV 「城」(同、九月二七日)
- V 「パーティー」(同、一〇月四日)
- VI 「東と西」(同、一〇月一日)
- VII 「普林亭主人」(同、一〇月一八日)
- VIII 「学生たち」(同、一〇月二五日)
- IX 「事件」(同、十一月一日)
- X 「別れ」(同、十一月八日)⁽¹³⁾

右に示したように『アメリカと私』は全二七編の文章から成っている。(一)内に記した発表年月日を見ると、これらの文章は一九六二年一〇月一四日から一九六四年二月八日までの約二年間に亘って発表されている。①～⑨、⑪～⑮はアメリカで書かれたもので、⑩は一九六三年七月に日本に途中帰国した際に書かれたものである。⑯は留学を終えて一九六四年七月(頃)にアメリカを発つた後、一ヶ月程ヨーロッパを旅行した際に書かれたものである。⑰はその旅行の後、八月に帰国してから書かれたもので、これ以下、I～Xは帰国後に日本で書かれたものである。

このように発表順に並べ替えてみると、江藤淳のアメリカ留学体験が時系列的に進行していることが

わかる。しかし、『アメリカと私』の配置構成に従って読んだ場合、そのような時系列的進行は第一部と第二部でそれぞれ独立してしまっており、全体としては一度きりのアメリカ体験を二度読まされることになる。この反復こそが第二部「アメリカ通信」の存在を希薄にしている最大の要因とも思われる。

このアメリカ体験の時系列的進行とは、言い換えれば、江藤淳の「私」の変容の過程ともいえるのである。本稿では、この変容をより明確に示すために、右に並べ替えたものをテキスト内で語られている時間に再配置してみたい。すると、それぞれの話は折り重なりながらも、微妙な差異を見せはじめるのである。以下にそれを示す。() 内はテキスト内の時制を示している。

I 「適者生存」(一九六二年八月二七日)

① 「第一信」(同九月)

II 「プリンストン」(同九月)

III 「大学」(同?月)

② 「十月二十八日の午後」(同一〇月二八日)

IV 「城」(同十一月)

③ 「キューバ危機の中で」(同十一月八日)

④ 「不安な巨人」日本について

V 「パーティー」(同十一月二〇日)

⑤ 「生きている古さ」(?)

- ⑥ 「合衆国と地方主義」(一九六三年二月八日)
- ⑦ 「深い南北の溝」(同二月一三日)
- VI 「東と西」(一九六二年～一九六三年三月)
- ⑧ 「冬と春の間」(同?)
- ⑨ 「青春と狂気」(同五月一二日)
- VII 「普林亭主人」(同七月～八月)
- ⑩ 「海老原喜之助の回顧展」(同)
- VIII 「学生たち」(同九月)
- ⑪ 「私を見たアメリカ」(同?)
- IX 「事件」(同二月二三日)
- ⑫ 「ケネディ以後」(一九六四年一月八日)
- ⑬ 「エリート」(同?)
- ⑭ 「アメリカの古い顔」(同?)
- ⑮ 「国家・個人・言葉」(同四月)
- X 「別れ」(同二月～四月一〇日)
- ⑯ 「米国から欧州へ」(同～七月一四日)
- ⑰ 「学問の自由化」(同?)

このようにテキスト内で語られている時間にしたがって再配置してみると、『アメリカと私』の「私」の変容過程がより明確になる。その一例として、ここでは時間的に隣接している①とⅡを比較してみた。①で江藤は、プリンストンの町を次のように描写している。

(前略) しかし、プリンストンがアメリカであろうか。ややコスモポリタンで、スノビッシュなまでに高踏的な知的ふんいき、大通りにネオンをつけさせぬ一種気取った清潔さ、礼儀正しくにこやかな教授たち、育ちのよい学生——これはたしかにアメリカのある面であろう。が、ここにはミシシッピの黒人共学問題の突風は吹いて来ない。ニューヨークのスラムの悪徳も浸透して来ない。膨張しつづけるロサンゼルスの俗悪な空気も見られない。この空気の希薄な感じ、世俗の僧院といったようなはだざわりはいつたいなんだろうか。⁽¹⁴⁾ (下線・引用者)

これに対してⅡでは、プリンストンの町を次のように描写している。

(前略) 町の様子は私が日本で想像していたのとあまりちがわなかったが、この美しい大学町のなかに、そこに属するものとしての自分を思い描くことは、きわめて困難であった。それはあまりに整然と取り澄ましすぎている。私は、この町のいったいどこに自分を容れる余地があるのかよくわからなかった。(中略) もしそれがニューヨークのような大都会だったら——ワシントンからラガーディア空港に着いたとき、西の空に林立する巨大な墓標の一群のように見えたマンハッタンの、

冷たい、黒い石造の摩天楼と、その間を黙々と過ぎて行くけわしい群衆のあいだでなら、暮らして行くことはむしろたやすそうに思われた。私はそこで自分の輪郭を喪い、あの画学生のような日常のなかに、自分の同一性を解消してしまうことすらできそうだった。(16)
(下線・引用者)

①とⅡのプリンストンの町の描写はほとんど同質のものである。①では「コスモポリタン」、「スノビッシュ」、「清潔」、「礼儀正しい」といった形容をしており、Ⅱでも「美しい」、「整然」、「取り澄ましすぎている」といった形容をしている。①もⅡも同様にプリンストンの町を、美しく清潔でありながらスノッブな町だと描写している。しかし、ここで注目すべきなのはプリンストンではなく、それに対置されているものである。

①ではプリンストンに対して、「ミシシッピの黒人共学問題の突風」、「ニューヨークのスラムの悪徳」、「膨張しつづけるロサンゼルス of 俗悪な空気」といった周縁的なものが対置されている。しかし、Ⅱでは「ニューヨークのような大都会」、「巨大な墓標の一群のように見えたマンハッタンの、冷たい、黒い石造の摩天楼」、「その間を黙々と過ぎて行くけわしい群衆」といった中心的なものが対置されているのである。つまり、プリンストンの町に対置されているものが①では周縁的なもので、Ⅱでは中心的なものなのである。

ここでは一例しか示せなかったが、この例からもわかるように、このような違いは『アメリカと私』の構成を再配置してみると至る所に散見できる。周縁と中心という対比も非常に興味深い問題ではあるが、本稿では、先に述べたように語り手である「私」(＝江藤)の性質の違いに限定して論じていき

い（もちろん、右に示した例も「私」の感覚の違いだということができる）。「私」の変容の具体的な事例は次章以降で検証するとして、さしあたって、ここでは「私」の変容の流れを示しておく。

まず、当然のことだが、ゼロ段階として留学前の「私」が想定できる。しかし、これはテキスト外の問題であるため、本稿で触れることは最小限にしておきたい。次に、①～⑨の「私」がある。これはアメリカに行った直後の「私」で、本稿ではこれを原型的な「私」と捉える。この「私」は、「自然」に根ざしており、これ以降に表れる「国家」に帰属する「私」ではない。「自然」や「国家」に関しては、次章以降で詳しく述べたい。次に、⑩の日本に一時帰国した際の「私」であるが、この「私」は東京オリンピックを控えてインフラ整備の進む東京の風景を見て失望してしまう。これを機に「私」は変容し始める。次の⑪～⑬の「私」は、すでに原型的な「私」ではなくなり、「国家」に帰属しようとする「私」が表出し始める。この「私」はこれ以降、I～Xの「私」に受け継がれていく。

以上、『アメリカと私』に表出している「私」の変容の流れを概観したのであるが、これは流れであって、各章ごとに個別的に表出しているわけではない。そのため次章以降の具体的な検証では、各章を個別的に検証するのではなく、この「私」の表出が特に顕著な箇所を提示していくことにする。

二 「アメリカ通信」の「私」

ここでは、「アメリカ通信」の「私」について検証してゆくが、先に述べたように「アメリカ通信」

の「私」は①～⑨↓⑩↓⑪～⑬と変容している。以下に、それが顕著に表れている箇所を見ていきたい。まず、②の「私」を見てみたい。タイトルにある「十月二十八日」とは、所謂「キューバ危機」が解決した日である。「私」はこの「キューバ危機」に遭遇した一週間を振り返って次のように述べている。

たとえば私は死を想い、自分の生い育った文化から切離されたまま死ぬのであれば不幸だと思った。そしてまた、そういう終末の予感が、ふだんは人工的で何かが欠けて感じられるプリンストンの町に、ある深い陰影をあたえているように見えることを、新鮮な発見のように思ったりした。そういえば、この若い国には一般に「死」に対する感受性が希薄なのかも知れない。そして、黒人のなかにはその感受性が濃くよどんでいるのかも知れない。気がつくとき合唱は終り、ホッジス嬢はG・M・ホプキンスの詩を読んでいた。私はその詩の異教的なまでに官能的な自然のイメージを、乾いた砂のように吸いこんでいる自分を感じた。(16)

ここで「私」は黒人教会で霊歌を聞きながら、「キューバ危機」を振り返って、「自分の生い育った文化から切離されたまま死ぬのであれば不幸」だと感じている。そして、「死」を想い、その「死」に対する「感受性が濃くよどんでいる」黒人女性ホッジス嬢の読む「官能的な自然のイメージ」の「詩」を「乾いた砂のように吸いこんで」いる。したがって、「私」と「黒人」は「自然のイメージ」を共有している。それに対して、プリンストンは「人工的」な町とされ、アメリカという「若い国」は「死」に対する「感受性が希薄」だとされている。つまり、「私」や「黒人」は「死」、「詩」、「異教的」、「官能的」

といった「自然のイメージ」に属しており、プリンストンやアメリカは「人工的」なものだとされているのである。この「自然」と「人工」という対比において、「自然」に属している「私」を本稿では原型的な「私」と定義しておく。

ここで付言しておきたいのは、「私」が「生い育った文化」（＝日本）がプリンストンやアメリカとは違い、「自然」に属しているということである。そのため、この「私」は「自分の生い育った文化」に疑いや戸惑いといったものを抱いておらず、無条件に「自分の生い育った文化」を許容しているのである。

次の⑥では、「私」が南部に旅行したときのこと書かれている。

たとえばここにはプリンストンあたりには見られない、南北戦争以前の面影をとどめた古い豪華な館が立ち並んでいる。それはたいい高い厚いヘイカ、繊細だが強靱な鉄柵をめぐらして、どこか放恣な感覚に媚びるようなものを持っている。しかも、これらの館とほとんど背中合せなつて、落魄をきわめたという感じの黒人街があり、そこにうごめいている黒人たちの顔は、つねに眼に見えぬものの攻撃に対して耳を澄ませているような、北部の「差別されていない」黒人の過敏な表情とはちがって、鈍い無表情に塗りつぶされているように見える。このように、美と頹廢した権力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティックなアイロニー——それはつねに「正しい」北部には決して存在しない。

これはまさしく社会的不正義であろう。だが、私はむしろこういう風土に出あってほっとした。

プリンストンに来て以来、何か物足らぬものがあると感じていたのが、このアイロニー、一種の官能の澀りのようなものであることがはっきりしたからである。社会的不正義もこれほどはつきりしているとはっきりと見える。それは、正義をかかげて隠微な自分を「生」から遠ざけて行く清教徒のカルヴェニズムより、私の感覚にぴったりする。少なくともここには偽りはないからだ。(17)

少し長くなってしまったが、この「私」は南部の「美と頹廢した権力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティックな」景色を見て、それを「社会的不正義」と形容している。そして、「私」はそれに「ほっと」し、自分の「感覚にぴったりする」と感じている。それに対して、プリンストンは「正義をかかげて隠微な自分を『生』から遠ざけて行く清教徒のカルヴェニズム」とみなされている。つまり、ここでは「社会的不正義」と「正義」という対比が為されており、「私」は「社会的不正義」に共感を示しているのである。

この箇所では、②の「自然」と「人工」の対比が「社会的不正義」と「正義」という対比に置き換えられているが、いずれにしても「私」はプリンストンの「人工」や「正義」に否定的な感覚を依然として有している。

次の⑨は、「私」がプリンストンで起きた学生たちの原因不明の暴動に関して、独自の見解を示している箇所である。

(前略) それは、平和に耐え切れなくなり、人工的な純潔と美に窒息しかけた若者たちの、死と破

壊の本能の爆発である。私のなかにひそんでいる同じものが、それを嗅ぎつける。この美しいキャンパス、この秩序立った日常——それが人間の常態であるわけがない。これは私が成長して来た世界ではない。プリンストンに着いてから、私はそう思いくらしてきた。今、私はこの学生たちが私と同じなにかを共有していることを知って、ある満足を感じている。私は学生デモにくっついて汗の臭いのような正義がきらいだった。しかし、このナンセンスな、花火のように無意味な破壊本能の爆発は、ちよつと美しい。(18)

ここで「私」は、プリンストンで起きた学生の暴動に「死と破壊の本能の爆発」を見てとる。その根拠は「私のなかにひそんでいる同じものが、それを嗅ぎ付ける」からである。だからこそ、「私」は学生「無意味な破壊本能」を「ちよつと美しい」と感じるのである。それに対置されているのは、例によってプリンストンという「人工的」な町である。あるいは一般的な「学生デモにくっついている汗の臭いのような正義」である。つまり、ここでも「私」は「人工」や「正義」ではなく、「死と破壊の本能」や「無意味な破壊本能」という「社会的不正義」に共感しているのである。

この「社会的不正義」は、②にあつたような「自然」と同義のものだと考えられる。というのも、プリンスントンに象徴される「人工」や「正義」を社会的な公理として考えるなら、それに反する「社会的不正義」や「死と破壊の本能」とは「自然」状態そのものであるからだ。したがって、いま引用した②、⑥、⑨の「私」は、「自然」という「社会的不正義」なものに属しており、「人工」や「正義」といった社会的公理には否定的な感覚を有しているのである。

さらに、②において「私」が「生い育った文化」を無条件に許容していたことは先に述べたが、⑨において、プリンストンを「これは私が成長して来た世界ではない」と否定しているように、「私が成長してきた世界」(＝日本)は屈託なく信頼されているのである。しかし、この「私」の信頼は⑩において揺らぎ始める。

⑩は、「私」がアメリカから一時帰国した際のエピソードである。そのときの東京の様子は次のように記されている。

丸一年プリンストンで暮して、東京に帰ってきてみると、街の色調が想像以上に醜くなっているのにびっくりした。ニューヨークもロサンゼルスも美しい都会ではないが、東京のまるで街中が象皮病にかかっているともいいたくなるような、灰白色の不健康な膚を持った大都会を私は知らない。これはあながちオリンピック目当ての土木工事のためばかりではない。いつの間にか新築されていた大都会のビルやホテルなどという完成品の膚もやはり醜いのである。どう見ても日本人の知悉している素材ではない。それらは美をかたちづくる素材というより、むしろむき出しになった觀念に近い性質のものに見える。「現代建築」とか「機能主義」とか、あるいは単に現実の西洋とはあまり関係のない「西洋」という觀念に。(19)

「私」が一時帰国したのは東京オリンピックを一年後に控えた一九六三年の夏であり、まさにインフラ整備などによって変貌を遂げている最中の東京であった。ここで「私」はその東京の姿を「醜い」と

感じ、「むき出しになった観念に近い性質」のものだとみなしている。さらにそれは「現実の西洋とはあまり関係のない『西洋』という観念」だと否定的に裁断されている。つまり、②や⑨で無条件に信頼していた「私」の故郷である東京は、いまや実在しない「西洋」という「観念」でしかなくなってしまったのである。

したがって、この「私」がもはや「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」といった故郷を喪失し、新たに変容して行くことは当然の展開であるといえよう。

次の⑩では、以下のような記述が見られる。

われわれのように、ひとつの民族からなる自然発生的な国家に生をうけたものには、言葉がこれほど大きな政治的役割を果たし得るといことが、なかなか理解しにくい、国語問題は日本人にとってはまず文化の問題である。しかし「アメリカ」とってはそれはまず政治の問題だ。かつて日本語も朝鮮、台湾の植民地経営にあたって政治的役割を果たしたが、これは日本語を母国語とする少数民族が、朝鮮語、福建語を母語とする少数民族を支配する道具としてつかわれたのである。⁽²⁰⁾

ここで「ひとつの民族からなる自然発生的な国家」とあるが、これは「私」が日本を単一民族国家として捉えているということである。確かに植民地としての朝鮮や台湾についても触れているが、これは国外の問題として説明されているに過ぎない。

実は、これと似た記述が①にもある。①では、「極く少数の中国人と朝鮮人をのぞいて、日本人しか

いないといつていいわが国」⁽²¹⁾と日本を説明しているが、この①にある「極く少数の中国人と朝鮮人」という留保が、①ではなくなり、国外の問題が説明されているだけになる。

この①の民族に関する認識自体多くの問題と誤解を孕んでいると考えられるが、さしあたって重要なのは、日本国内の日本語を母語としない者たちを「私」がほとんど考慮していないということである。この問題が重要だと思われるのは、「私」≡江藤淳がアメリカ留学以前には、このようなエスニシティ問題に関する視点を欠いていたわけではなかったからである。

少しテキストから逸れてしまいが、留学前の江藤をテキストにおけるゼロ段階の「私」と考えれば、有効な視点であると思われるので、参照しておきたい。一九五八年に江藤はアイヌ民族を取り上げた武田泰淳の小説『森と湖のまつり』（一九五八）を次のように批判していた。

（前略）『森と湖のまつり』の一貫した話者は、和人の女画商佐伯雪子であるが、彼女は池博士という人道主義者の和人の学者の秘書のようなことをして旅行している旅行者にすぎない。風森一郎というアイヌ青年の英雄と肉体関係を結んだり、事件の渦中に身を投じたりするところを見れば、彼女はかならずしも傍観者ではなく、事件に参加した人物であるが、さりとてアイヌでもない。かならずしも傍観者ではない旅行者、この不徹底な設定はおそらくそのままこの主題に対する作者の立場である。和人はアイヌではなく、しかもアイヌは日本人でないことはない。このような二律背反の結果、この作品の作中人物は奇妙に拡散し、印象が弱められ、武田氏の貴重な問題である存在論の部分はおろそかにされざるを得ないのである。⁽²²⁾

ここで江藤が問題としている論点は、エスニシティ問題とはなんら関係のないことなのであるが、とはいえ「和人はアイヌではなく、しかもアイヌは日本人でないことはない」という記述が示しているように、ここで江藤は「日本人」のなかに「アイヌ」と「和人」といった複数の民族が存在していることを認めているのである。つまり、「日本人」がある種の概念、あるいは幻想であることに充分自覚的なのである。

しかし、⑩の「ひとつの民族からなる自然発生的な国家」という記述には、複数の民族という考え方は見られない。また、「国語問題は日本人にとってはまず文化の問題」という箇所では、「日本語」を母国語としない少数民族や在日外国人の存在が忘れられてしまっているのである。

もちろん先に指摘したように①にも似たような記述があるので、必ずしもこの時点で「私」が「日本人」を単一民族として考えるようになったとは言えない。だが、⑪で「私」が「国語」という「国家」の強制する言語を「日本人」の「文化」の問題として一般化しているところには、⑩において「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」を喪失した「私」が、その「世界」を「国家」として回復しようとする意志があるように思われる。

次に引用する⑮では、その「私」の意志が顕著に現れている。

私は自分を日本につなげているきず^な、^ながあると感じる。それは、日本から私に向って来るものではない。むしろ私のほうから日本に向かって行くものである。それは要請ではなく、自発的な結びつきであり、その意味でかならずしも私を日本という「国家」には近づけない。が、決してそれは

単に個人的なき、ず、な、ではない。私を含みながら、しかも私を超えているからである。もちろん、それは言葉である。私という個体を、万葉集以来今日までの日本文学と思想の全体につなげている日本語という言葉である。⁽²³⁾ (傍点原文)

ここで「私」は、自分を「日本」につなげているものは「言葉」という「きずな」だと述べている。それは「国家」に「私」を近づけるものではなく、「自発的な結びつき」だという。この「自発的」という言葉に端的に表れているように、「私」は意図的に「国家」を呼び込んでいる。また、「それは単に個人的なきずなではない。私を含みながら、しかも私を超えている」という記述には、「私」という個人的な存在が国家的全体性の上に成り立っているということが説明されているのである。だからこそ、「日本語」という「国家」の強制する「言葉」が選び取られ、さらに「万葉集以来」という「創られた伝統」⁽²⁴⁾ というほかない古典とつながってしまうのである。

以上に見てきたように、「アメリカ通信」の①～⑨の「私」は「自然」に属し、「社会的不正義」を肯定していたが、⑩でその「自然」として「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」を喪失して、⑪～⑰ではその喪失から回復するために「国家」というものが呼び込まれていた。したがって、「アメリカ通信」全体として見れば、二つの性質を持った「私」が存在しているということになるだろう。

三 「アメリカと私」の「私」

次に「アメリカと私」の「私」を検証していききたい。先に述べたように、「アメリカと私」のⅠ～Ⅹの「私」は、「アメリカ通信」の⑪～⑰の「私」を引き継いでいる。

Ⅰの冒頭近くで、「私」は二年間の留学終えて、「いま自分のうちのかなかが変わったと感じている」と述べた後、次のようにこの「アメリカと私」という「物語」を語り始める。

(前略) どうやら私は、かつて空気のように自然なものと感じていた日本の社会をどこか「異質」と感じるほど深く米国の社会につかかってしまっていたらしい。もちろんそうなるまでにはかなりの時間がかかった。私が、米国の新しい環境で、もとの自分を取り戻すまでにすら、「生活」が気化して行くような、あるいは自分の存在意義が無限に縮小して行くような、短いがかなり深い混乱の時期があった。まず、そのころのことから書きはじめようと思う。(25)

ここで「私」は自分が変わったことに自覚的である。それは「日本」を「異質」に感じるほどの変化だという。すでに「アメリカ通信」の検証をしてきた本稿にとつては、その変化は自明のものである。なぜなら、「私」は「自分の生い育った文化」や「私が成長してきた世界」の喪失を体験しているからである。だが、「アメリカと私」の喪失体験はそのようなものではないのである。まず、Ⅰで語られているエピソードから見てみたいと思う。

Iでは、アメリカ留学に同行した「私」の妻が、アメリカに到着してすぐに腹痛で倒れてしまうという話題から語られている。「私」は妻を病院に連れて行こうとするのだが、不運にもその日は休日である。病院を探すのに苦労してしまう。そして、「私」には家内の肉体的苦痛を感じるすべがなく、家内にも私の心理的混乱を味わうすべがない」と感じる。ようやく病院を見つけたが、治療費にロックフェラー財団からの給費のほとんどを費やしてしまい、アメリカの医療制度に困惑する。そのようにして、アメリカ社会の「適者生存」の論理」を発見するのである。「私」はアメリカでは「病人は不適者であり、不適者であることは『悪』である。『悪』は当然『善』であるところの適者に敗れなければならない」、「この国で自己を主張しようとしたら、まず適者でなければならない」と確信して、「適者」となるべく、自らロックフェラー財団に治療費用を請求し、また保険会社からも支払い金額をすべて受け取る⁽²⁶⁾。

このようにIで提示された「適者生存」の論理」は、このあとのII～Xを貫く論理でもある。以下、「アメリカと私」の概略を述べておく。

「私」はこの後、プリンストンで生活をはじめますが、すぐにアメリカにおいては自分が日本の批評家であったことはほとんど知られておらず、そうである以上、自分は「社会的な死を体験」⁽²⁷⁾しているのだと感じるようになる。当時「私」は江藤淳は、日本の文壇ではすでに『夏目漱石』(一九五六)でデビューして以来、『奴隷の思想を排す』(一九五八)、『作家は行動する』(一九五九)、『小林秀雄』(一九六一)などの評論で⁽²⁸⁾、気鋭の若手批評家として認知されていた。しかし、アメリカでは批評家としての「私」は知られておらず、このことで「自己の同一性」の危機に陥ってしまうのである。だが、留学直前に日本で刊行していた『小林秀雄』が新潮文学賞を受賞したこと、プリンストンで「East

Asian Studies Program」という研究会で「小林秀雄に関する紹介ノート」⁽²⁹⁾という発表をしたことが重なり、これをきっかけに少しずつ批評家としての「自己の同一性」を回復していくのである。また、日常生活においても『適者生存』の論理に従って、ロックフェラー財団に自ら手紙を送り交渉をして給費を増額し、あるいは自宅でアメリカ式のパーティーを開くなどして、徐々にアメリカ社会で自己を主張し「適者」になっていく。さらに留学二年目には、プリンストン大学の東洋学科で「古典日本文学」や「近代日本文学」の講義や、大学院のゼミを担当するようになる⁽³⁰⁾。

まさに、このようにして「私」はアメリカ社会で「適者」として成長していく。したがって、「アメリカと私」ではIにおいて、「不適者」から「適者」へ、あるいは「自己の同一性」の危機から回復へという変容の道筋があらかじめ提示されているわけである。したがって、「アメリカと私」の喪失体験とは「自分の生い育った文化」や「私」が成長してきた世界」の喪失ではなく、「自己の同一性」の喪失なのである。そのため、「アメリカと私」が「自己の同一性」を回復する「物語」となるのは必然であると思われる。

以下、「アメリカと私」を詳しく見ていくが、ここでも先に述べた通り限定的に「アメリカと私」の「私」についてのみ考察していきたい。

まずⅢでは、「私」が留学前、ロックフェラー財団の書類に研究テーマを「十八世紀英文学研究」と書いていたことが明かされる。ところが、それは「米国に対するてれ」から生じたもので本気ではなかったという。そして、プリンストン大学出身の作家スコット・フィッツジェラルドに目をつけるのだが、

フィツジェラルドすらも満足の行く研究対象には思えなかった。その理由を「私はフィツジェラルドが、私の周囲にいる、異った神を信じ、異った肌と髪と体型を持ち、異った倫理と生活態度とによつて生きている欧州系の——つまり大多数の米国人のひとりであることを、まず感じないわけにはいかなかった」と語っている。このような認識をするなかで、「私」は自らが日本人であることを意識していく⁽³¹⁾。

私は、まず、自分が自分であつてそれ以外の何者でもないことを、自分を育てた日本の歴史と文化遺産の一切とともに、引受ける必要があつた。⁽³²⁾

ここで「私」は「自分を育てた」ものを「日本の歴史と文化遺産」と明確に規定している。つまり、「自分」を「歴史」に連なるものとして位置づけているのである。したがつて、この「私」が「自分が自分であつてそれ以外の何者でもない」というときの「自分」とは「歴史」的に位置づけられた日本人である。「私」にほかならない。ところが、このⅢのテクスト内の時間に隣接する、「アメリカ通信」の②では先に示したように「自分の生い育つた文化」が無条件に信じられていて、決して「歴史」性を帯びたものではなかつたはずである。

次に引用するⅣも同様である。

そして、コンファレンスのはじまる前の日の朝にまいこんで来た『小林秀雄』受賞の電報は、この二つの国のあいだにいる自分が、ほかならぬ日本語の文化の樹液を受けて生きていることを、あ

るひそかな誇りとともに、思い知らせた。私のなかには、自分がなんであり、今どこにいるのか、という感覚が、ようやく蘇りつつあった。私は、明らかに生きはじめていた。⁽³³⁾

ここで言及されている『小林秀雄』受賞の電報』は、先に触れた留学直前に刊行した『小林秀雄』が新潮文学賞を受賞したという報せのことである。ここで「私」はその報せを聞いたとき「日本語の文化の樹液を受けて生きている」と感じている。ここにおいても「日本語の文化」とある以上、「自分がなんであり」というときの「自分」は、「日本」に属している。

あるいは、「私」がある研究会での発表を終えた直後に「私は、今、日本語の文化のなかに存在するひとりの批評家として、そのままのかたちで少数ではあるが熱心な聴衆に、うけいれられていた」と感じているが、ここで単なる「ひとりの批評家」ではなく、「日本語の文化に存在する」と付け加えてしまふところにも、「私」が「日本」に帰属しようとする意志が垣間見える。これも時間の隣接する「アメリカ通信」のテキストには見ることができなかった「私」である。⁽³⁴⁾

ところで、この「私」は「日本語の文化の樹液を受けて生きている」とか「日本語の文化のなかに存在するひとりの批評家」といった自己規定をしているわけだが、このような表現に付帯するある種の意図的操作はⅥにおいて例えば次のように表象される。

だれかがいったように、日本という国は、国中がひとつのプライベート・クラブのような国である。この一民族一国家という、まれにみる均質な国には、ヴェリエルモ氏のような「親日家」を

不幸にする、執拗な拒否の力がかくされていた。(35)

あるいは、Ⅷの大学の講義においては、「日本」は次のように説明されている。

(前略) キリスト紀元前後の数世紀間の日本は大陸、半島、及び南洋からの移民によって形成されていたという意味で、今日の合衆国とどこか似ているともいえること。しかし、これら各々の移民集団は、共通の文化として水稲作を共有しており、その個々の神話——太陽と水をめぐる神話を統合することが、とりもなおさず「日本文学」の誕生につながり、今日「日本人」として知られている単一民族の形成につながる政治的事件でもあった。(36)

ここで「私」は「一民族一国家」、「単一民族」として「日本」や「日本人」を説明しているが、このような認識は、言うまでもなく少数民族や在日外国人の存在を忘却することで成り立つ。もちろん、Ⅵに関しては回想的にこのような認識を述べているのであるから、作者江藤淳の現在進行形の認識である。また、Ⅷも一時帰国を挟んでからの出来事なので、「アメリカ通信」の⑩にある認識と同様であろう。さしあたって、ここから理解できることは、「日本語の文化の樹液を受けて生きていく」とか「日本語の文化のなかに存在するひとりの批評家」という自己規定の背後には、本来存在しているはずの「日本語」を母語としない者たちの忘却することによって、自己の帰属する「日本」を確立しようとする意志がみてとれるということである。

そして、このような忘却によって確立した「私」が帰属する「日本」とは単なる文化的背景ではなく、国家として前景化してくる。次に引用するⅢの一節はそれをよく示している。

私は、ふと自分が明治時代に投げかえされたような幻覚を感じた。士族出の、あるいは新しい知的氏族たらんとする「書生」たちが、ウェブスターの辞書を前にして、いわば *Learnings in the Nation's Service* を想っていたあの時代——つまり、私は、そのときほんの一瞬の間ではあったが、周囲に士族の雰囲気とでもいうべきものを感じたのである。が、それは単に、あまりに反士族的なものが充満している東京から来た私が、異質の学園に触れて、自分のなかで眠っていたなにかを喚び覚されたために感じた幻覚だったかも知れない。幻覚であるにせよ、それは快い体験であった。私は、ここには依然としてあり、戦後の日本からは消え去ってしまったある精神を想った。私は、両の眼に涙がにじみ出て来るのを感じた。(37)

ここで「私」はプリンストン大学の構内で「明治時代」を幻視し、「戦後の日本からは消え去ってしまったある精神」を想っているが、この「ある精神」とは「*Learnings in the Nation's Service*」という「お国のため」とも言うべき「精神」である。この「Nation」（＝国家）という言葉が端的に示しているとおり、「私」が意識する「日本」とは国家のことにほかならない。

したがって、「アメリカ通信」では後半に「国家」を志向する「私」が表出していたが、「アメリカと私」では前半においてすでに「私」の「国家」に対する帰属意識が表れているのである。このように

「アメリカと私」を見てみれば、この物語に表出している「私」が、明らかに帰国後に創られたものだということがわかるのである。

以上に見てきたように、「アメリカと私」の「私」は、「自己の同一性」を保障するために「日本語の文化」という枠組みを作った上で、「国家」としての「日本」に帰属しようとしていると結論することができるだろう。

四 「白樺」としての「私」

ここまで、「アメリカと私」と「アメリカ通信」の「私」の差異を検証してきたが、この差異は端的に言えば「私」の帰属意識の違いである。つまり「アメリカと私」の「私」は「国家」としての「日本」に帰属していて、「アメリカ通信」(①～⑨)の「私」は「自然」に属しているということである。先に見たようにこの「自然」は、「死」や「詩」、あるいは「黒人」や「官能」、「本能」、「破壊」、「爆発」といったものを包括するイメージであった。したがって、原初的なイメージの総体として考えられているのである。

ところで、この「自然」に属する「私」はどのような「私」なのか。最後にこの「私」の性質に関して触れておきたい。

「アメリカ通信」前半部の「私」は「自然」に属しており、「社会的不正義」には肯定的であった。例えば、先に示した⑥では南部の「美と頹廢した権力の腐臭との対照がづくり出す奇妙にエロティックな

景色をみて「私」は「ほっと」していた。

いま一度その南部の描写を引用してみたい。

たとえばここにはプリンストンあたりには見られない、南北戦争以前の面影をとどめた古い豪華な館が立ち並んでいる。それはたいい高い厚いヘイカ、繊細だが強靱な鉄柵をめぐらして、どこか放恣な感覚に媚びるようなものを持っている。しかも、これらの館とほとんど背中合せなつて、落魄をきわめたという感じの黒人街があり、そこにごめいている黒人たちの顔は、つねに眼に見えぬものの攻撃に対して耳を澄ませているような、北部の「差別されていない」黒人の過敏な表情とはちがって、鈍い無表情に塗りつぶされているように見える。

このような南部を「私」は「社会的不正義」と呼んでいたのである。これは明らかに「国家」の対極に位置するようなものである。これは言い換えれば、「国家」的秩序の対極にある、無秩序状態の「自然」であろう。

ところが、「アメリカと私」のⅥには、いま引用した「アメリカ通信」の⑥とは対照的な記述が見られる。

(前略) 年末年始の休暇を、新潮賞の賞金を旅費にあてた南部三州(南カロライナ、ルイジアナ、テキサス)の旅行についてやして、久しぶりにわが家に帰りついたところには、不思議なことに、最初

あれほどはいりにくく見えたプリンストンが、すでに「自分の町」に変身していた。それは知的雰囲気にあふれた、清潔な、気品のある町であり、私はそこに属していた。ペンシルヴェニア鉄道の支線の駅を降りたとたんに、家内と私は、あの家に帰って来たときの、ほっとした気持ちにとりつかれたのである。(38) (傍点原文)

ここでは南部の旅行から帰ってきた「私」が「知的雰囲気にあふれた、清潔な、気品のある町」に「ほっとした」と感じているのである。テクスト内で語られている時間に沿って考えれば、「美と頹廢した権力の腐臭との対照がつくり出す奇妙にエロティック」な南部に「ほっと」した直後のことなのである。それこそ「同一性」を疑いたくなるような「私」の突然の変化が、「アメリカと私」と「アメリカ通信」との間には起こっているのである。

あるいは、いま引用した「アメリカと私」の記述の直前には次のような箇所がある。

(前略) 意味もなく忙しい東京の文筆生活のあいだに、私はいつの間にか季節の移り変りに対する感受性を喪くしかけていた。それが米国の生活に少しずつ足を踏み入れて行くうちに、突然自分のなかに回復され、それと同時に、自然もまた自分に近づいて来る……。この感覚は、貴重であった。(39)

ここでは「自然」が、「自分に近づいて来る」ものだとされている。先に引用した「アメリカ通信」の⑮で「私」は、「日本語」という「きずな」は「かならずしも私を日本という『国家』には近づけな

い」と感じていた。その意味では右の「自分に近づいて来る」「自然」とは違う性質のものだと、とりあえずは考えられそうである。しかし、⑮では「日本語」を「私を含みながら、しかも私を超えている」ものだとも説明していたのであった。つまり、「日本語」や「国家」とはあらかじめ「私」を包括しているものだったのである。したがって、右の引用では「自然」が「自分に近づいて来る」感覚が「回復」と同時に感受されているのであるから、これは「日本語」や「国家」を再発見したことで同種の現象なのである。そもそも右の「自然」が「季節の移り変わり」という極めて秩序だったものとして認識されている以上、「アメリカ通信」における無秩序状態の「自然」とは異なるものなのである。したがって、ここには「自然」という語の意味の変容とも言うべきものが起きているのである。

ところで、本稿の冒頭で、江藤淳は『アメリカと私』を刊行したのちに、「日本文学と「私」——危機と自己発見」という評論を発表したと述べたが、この評論において江藤は「江戸期の日本人の世界像を決定したのは、幕府が公式のイデオロギーとして採用した朱子学であった」とし、「朱子学の世界像」を再評価したのであった。江藤によれば、この「朱子学の世界像」は「西洋」との接触によって危機に晒され、坪内逍遙の『小説神髓』は「朱子学の世界像」のもとで形成された江戸戯作の勧善懲悪的な「文学」観を近代化すべく書かれたという。しかし、逍遙はまだ「朱子学の世界像」のなかで生きていたとする江藤は、「この世界像の完全な崩壊を体験するのは、たとえば夏目漱石である」と論じる。この崩壊は「西洋」という「他人」に出会うことによって引き起こされるが、それは「幻滅と深い喪失感をともなう」という。そのような「喪失感」「私」——自我という巨大な怪物をどう処理すべきかという難問に直面」することで起き、漱石が『私』の露出を、『悪』あるいは『醜』とし、『善』または『美』

とは見なかつたのは、彼の喪失感がいかに深かつたかを物語っている」と江藤は指摘している⁽⁴⁰⁾。

つまり、この意味で漱石の世代はいまだに「朱子学的世界像」の影響下にあつたのである。そのような漱石世代に対して江藤は、白樺派の代表的作家である武者小路実篤を対置させる。武者小路の有名な漱石批判『「それから」に就て』（一九一〇）を引用した後、江藤は次のように述べる。

（前略）武者小路氏が「自然」といつているのは「私」―「自我」のことであり、「社会」と呼んでいるのはこの場合いまだに朱子学的価値体系の枠内に安住している者の「常識」、あるいは「道徳」である。『それから』で、漱石は、代助を社会からはじき出された者とするにおいて彼の自己主張を「悪」、あるいは「醜」とした。この点で、当時の新世代であつた「白樺」の作家武者小路氏は、漱石と激しく対立する。⁽⁴¹⁾

江藤はこの引用の後で、「白樺」は「自然を社会に調和させず、社会を自然に調和させる」ことを「新世代の倫理」としたとも述べている⁽⁴²⁾。当然の事ながら、この場合の「自然」は右の引用にあるように「私」あるいは「自我」という言葉に置き換えられる。したがって、漱石世代と「白樺」世代の対立とは「私」・「自我」の捉え方の違いとなるわけである。この違いを端的に示しているのが、江藤の次のような指摘である。

（前略）かつて自己完結的な秩序を保障していた朱子学的世界像が崩壊したとき、皮肉なことに日

本は新しい自己完結的無秩序に到達していたのである。「白樺」の自己肯定は、ほかならぬこの充足した無秩序の肯定であった。⁽⁴³⁾ (傍点原文)

ここで江藤は「白樺」の台頭を機に、近代日本文学は「社会」を見失い、「私」だけの世界に陥ってしまったと述べているのであるが、その「私」だけの世界を「自己完結的無秩序」だと批判しているのである。ここで江藤が「白樺」の「私」を「無秩序の肯定」であったといっていることに注意したい。

前に述べたように、「アメリカ通信」前半部の「私」は無秩序的な「自然」状態を「社会的不正義」として肯定していた。しかし、「日本文学と『私』——危機と自己発見」では、「無秩序」を肯定する「白樺」の「私」を批判しているのである。つまり、『アメリカと私』において表出した「自然」に属する「私」と「国家」に帰属する「私」の関係は、「日本文学と『私』——危機と自己発見」の漱石世代と「白樺」世代との対立にそのまま対応するのである。

ここで詳述することはできないが、『夏目漱石』でデビューして以来、一貫して漱石の支持者であった江藤は、必ずしも白樺派を評価してはいなかった。また「日本文学と『私』——危機と自己発見」においても白樺派は批判の対象となっている。だが、それにもかかわらず、ここでは「アメリカ通信」前半部の「私」と「白樺」の「私」が対応してしまっているのである。このことの意味はきわめて重要であり、『アメリカと私』以前に書かれた江藤の批評の読み直しが必要であろうが、それは本稿の目的ではない。

ここでさしあたって理解しておきたいのは、「アメリカと私」の「自然」が秩序を意味しており、「ア

「アメリカ通信」前半部の「自然」が「無秩序」を意味していたことと、江藤が「日本文学と『私』——危機と自己発見」で示した「白樺」の「私」が、「アメリカ通信」前半部の「私」と合致しているということである。

おわりに

本稿の冒頭で述べたように、「アメリカと私」は「私」（＝江藤淳）の記憶／記録が編み上げられたテキストである。第一部の「アメリカと私」は、帰国後に留学の記憶として書かれたもので、第二部の「アメリカ通信」は留学中に記録されたものである。本稿ではこれらのテキストを初出の発表順に並べ替えることで、「私」の性質を検証した。その結果、語り手たる「私」が、「自然」という無秩序に属し「社会的不正義」を肯定する「私」から、「国家」としての「日本」や「社会」という秩序に帰属する「私」へと変容していることがわかった。

この変容の過程は、既存の配置構成に従って読むだけでは容易に表出してくるものではない。では、この構成にある種の意図があるというのは、過言であろうか。

例えば、江藤淳が生前、最後に刊行した文春文庫版の『アメリカと私』（一九九一）では、「アメリカ通信」の③⑩と⑭が削除されて、代わりに一九七二年に刊行された『アメリカ再訪』⁽⁴⁴⁾が抄録されている。これにはもちろん、さまざまな編集上の理由があったのだろうが、削除されている箇所が「アメリカ通信」の前半部という原型的な「私」が表出している部分だけに、そこにある種の意図を感じざる

を得ない。あるいは、この削除は逆に、削除した部分への注意喚起だったのかもしれない。いずれにしても、この削除によって『アメリカと私』という記憶／記録からなる書物の持つ意味は著しく改変されてしまっているように思われる。

おそらく初版『アメリカと私』の構成にも、作者の明確な意図があったはずである。前述したように、『アメリカと私』を既存の配置構成にしたがって読むと、「自己の同一性」の危機から回復する物語として読めるわけであるが、この回復の物語には「洋行帰りの日本回帰」という常套句を否定する意図があるように思われる。つまり、「私」はアメリカに行つて変容したのではなく、「私」を回復したのだということを提示することで、近代の多くの外国経験者が体験した「日本回帰」の文脈から、一線を引いたのである。

しかし、そのような意図を超えたところに、「アメリカ通信」前半部の「私」、つまり「白樺」としての「私」はあると考えられる。それは江藤にとつては否定されるべき「私」だったにちがいない。というのも、先に述べたように、批評家としての江藤淳は必ずしも白樺派に肯定的だったわけではないからである。もちろん、江藤の論じる「白樺」が、実際の白樺派をどの程度正確に描いているかは疑問である。だが、そうだとしても江藤淳と白樺派というつながりはテキストには見出せるわけである。これは『アメリカと私』以後の江藤の批評の軌跡を見ていく上でも、新たな視点になると思われる。これを今後の課題として、本稿を締めくくりにしたい。

(しおや まさひろ・日本文化専攻博士課程三年)

【註】

- (1) 江藤淳『アメリカと私』（朝日新聞社 一九六五・二）、七頁。本稿の引用はこの朝日新聞社版による。
- (2) 佐藤泉『治者』の苦惱——アメリカと江藤淳（戦後批評のメタヒストリー 近代を記憶する場）（岩波書店 二〇〇五・八）所収）、松下浩幸『江藤淳『アメリカと私』論——戦後日本の自画像とその問題点——』（明治大学教養論集 二〇〇五・九）などが江藤のアメリカ留学の背景に関して意義深い研究を行っている。また、佐藤には別に『非色』―複数のアメリカ／複数の《戦争花嫁》（『有吉佐和子の世界』（翰林書房 二〇〇四・一〇）所収）という有吉佐和子論があり、有吉佐和子のアメリカ体験と江藤のアメリカ体験と比較して論じている。
- (3) アメリカへの留学年は、福田恆存、大岡昇平（一九五三年—一九五四）、中村光夫（一九五五—同途中帰国）、阿川弘之（一九五五年—一九五六）、小島信夫、庄野潤三（一九五七—一九五八）、有吉佐和子（一九五九—一九六〇）、安岡章太郎（一九六〇—一九六一）。
- (4) 邦訳『日本における近代化の問題』（細谷千博編訳、岩波書店 一九六八・七）。
- (5) 江藤淳『日本文学と私』——危機と自己発見（『新潮』 一九六五・三）、本稿では福田和也編『江藤淳コレクション4』（ちくま学芸文庫 二〇〇一・一〇）所収のものを参照した。
- (6) 江藤淳『アメリカと私』（講談社 一九六九・五）、『アメリカと私』（講談社文庫 一九七二・六）、『アメリカと私』（文春文庫 一九九一・三）、『アメリカと私』（講談社文芸文庫 二〇〇七・六）。
- (7) これまで、「〜と私」というタイトルは、『アメリカと私』においてはじめて使われたと考えられてきたが、それよりも前に「仔犬と私」（『ヒッチコック・マガジン』（一九六〇・二）、『犬と私』（三月書房 一九六六・四）所収）、『バルザックと私』（『バルザック全集』（東京創元社 一九六〇・二）、前掲『犬と私』所収）、『石原慎太郎と私』（『新鋭文学叢書 6』（筑摩書房 一九六〇・七）、『石原新太郎論』（作品社 二〇〇四・四）所収）というエッセイがある。本稿で『アメリカと私』を端緒とみるのは、そのタイトルが意識的に使われたという意味においてである。参考までに、『アメリカと私』以降のものここに挙げておく。「現代と漱石と私」（初出不明（一九六六・二）、『文学と私・戦後と私』（新潮文庫 一九七四・二）所収）、前掲『犬と私』、『戦後と私』（『群像』（一九六六・一〇））、前掲『文学と私・戦後と私』所収）、「文学と私」（『われらの文学 22』（講談社 一九六六・一一））、『星陵』と私

(日比谷高校生徒会誌「星陵」(一九六六・?)、「日本と私」(「朝日ジャーナル」(一九六七・一・一—三・一七)、福田和也編『江藤淳コレクション』2「ちくま学芸文庫 二〇〇一・八」)、「初詣と犬と私」(初出不明(一九六七・二)、「旅の話・犬の話」(一九七〇・九)所収)、「英語と私」(講演(一九六九・七)、「考えるよろこび」(講演社 一九七〇・一)、「山川方夫と私」(「山川方夫全集 5」(一九七〇・四)、「ブレ氏と私」(「週刊現代」(一九七二・六・一〇)、「アメリカ再訪」(「文芸春秋社 一九七二・四」)所収)、「場所と私」(「群像」(一九七二・一〇)、「フロラ。フロラアヌと少年の物語」(「北羊社 一九七四・一二」)所収)、「前掲『文学と私・戦後と私』、「夏目漱石と私」(「波」(一九七四・一一)、「学位と私」(初出不明(一九七五・五)、「なつかしい本の話」(新潮社 一九七八・五)所収)、「漱石と慶応義塾と私」(講演(一九七五・五)、「新編江藤淳文学集成 1」(河出書房新社 一九八四・一二)所収)、「明治の群像」と私」(初出不明(一九七六・五)、「仔犬のいる部屋」(「講談社 一九七九・六」)所収)、「テレビドラマと私」(初出不明(一九七六・五)、「前掲『仔犬のいる部屋』」所収)、「海は甦る」とわたし」(「週刊現代」(一九七六・?)、「続々こもんせんす」(「北羊社 一九七六・一一」)所収)、「健康法とわたし」(「週刊現代」(一九七六・?)、「前掲『続々こもんせんす』」所収)、「海は甦る」と私」(初出不明(一九七七・八)、「前掲『仔犬のいる部屋』」所収)、「戦艦大和の最後」と私」(「諸君」(一九八一・一二)、「小林秀雄と私」(「文化会議」(一九八三・九)、「批評と私」(「新潮社 一九八七・七」)所収)、「ワープロと私」(「西御門雑記」(「文芸春秋 一九八四・一一)、「ケネディと私」(「朝日ジャーナル」(一九八八・一二・二二)、「ジャーナル」と私」(「人と心と言葉」(「文芸春秋社 一九九五・七」)、「SFCと漱石と私」(「Voice」(一九九七・四)、「国家とはなにか」(「文芸春秋社 一九九七・一〇」)所収)、「妻と私」(「文芸春秋社 一九九九・七」)。「その他に江藤淳としてデビューする前に、本名の江頭淳夫名義で「安藤元雄とぼく」(安藤元雄「秋の鎮魂」(「位置社 一九五七・九」)所収)というしおりがある。

(8) 前掲、「日本文学と『私』——危機と自己発見」参照。

(9) 社会心理学者のエリック・エリクソンが提唱した概念。因みに「自己の同一性」は「アイデンティティ」と訳されるが、社会学者の上野千鶴子は「アイデンティティ」という概念は「江藤淳が、『成熟と喪失』[1967]のなかで紹介したことを通じて、日本社会に浸透し、定着した」(「脱アイデンティティの理論」、上野千鶴子編「脱アイデンティティ」(「頸草書房 二二〇〇五・二二」)所収、四頁)と述べている。しかし、本稿で示したように江藤淳がこの概念

をはじめ用いたのは『アメリカと私』においてである。だとすれば、この概念を使って説明された江藤のアメリカ体験は、当時の読者にどの程度理解されたのであろうか。

- (10) 川島至「アメリカと私」、『國文學』（學燈社 一九七一・一）一〇二—一〇七頁。
- (11) 前掲、佐藤泉「『治者』の苦悩——アメリカと江藤淳」一五五頁。
- (12) 前掲、松下浩幸「江藤淳『アメリカと私』論——戦後日本の自画像とその問題点——」二八頁。
- (13) 朝日新聞社版『アメリカと私』にのみ奥付に「発表紙覚書」として、初出一覧が載っている。
- (14) 前掲、『アメリカと私』一七一頁。
- (15) 同右、二六—二七頁。
- (16) 同右、一八五頁。
- (17) 同右、二二—二二頁。
- (18) 同右、二三九—二四〇頁。
- (19) 同右、二四—二五頁。
- (20) 同右、二五—二六頁。
- (21) 同右、一七五頁。
- (22) 江藤淳「『氾濫』と『森と湖のまつり』」（『近代文学』 一九五八・九）、江藤淳『海賊の唄』（みすず書房 一九五九・八）所収、一六頁。
- (23) 前掲、『アメリカと私』二八九頁。
- (24) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編『創られた伝統』（前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊国屋書店 一九九二・六）参照。
- (25) 前掲、『アメリカと私』一一頁。
- (26) この段落の引用は前掲、『アメリカと私』七—三三頁。
- (27) 同右、六〇頁。
- (28) 江藤淳『夏目漱石』（東京ライフ社 一九五六・一一）、『奴隷の思想を排す』（文芸春秋社 一九五八・一一）、

- 『作家は行動する—文体論について—』（講談社 一九五九・二）、『小林秀雄』（講談社 一九六一・一一）。
- (29) 前掲、『アメリカと私』六九頁。
- (30) 同右、一一七—一三三頁、一五〇—一六五頁参照。
- (31) この段落の引用は前掲、『アメリカと私』三九—五四頁。
- (32) 同右、四六頁。
- (33) 同右、六九頁。
- (34) この段落の引用は前掲、『アメリカと私』七〇頁。
- (35) 同右、九五頁。
- (36) 同右、一二三頁。
- (37) 同右、四八—四九頁。
- (38) 同右、八七—八八頁。
- (39) 同右、八七頁。
- (40) 前掲、「日本文学と『私』——危機と自己発見」参照。
- (41) 同右、九九頁。
- (42) 同右、一〇四頁。
- (43) 同右、一〇七頁。
- (44) 江藤淳『アメリカ再訪』（文芸春秋社 一九七二・四）。

